

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 164号

平成27年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (13)

平凡な生活

内会員の顔をわざわざ見に来てくれて感謝深い。これからも来てほしい。若い時にはこの世の華々しい殊に興味を持つが、私は今の牧師という職を通して考えることは、平凡な生活を感謝しつつ過ごすことによって人のためとなる生活が送れると思う。若い内に地の塩、世の光ということをしっかりつつかんで欲しい。人間の深さというものは分からないものだ。

(昭和41年5月13日 金曜会)

分からんからへばりつく

大正5年からのこの建物ともいよいよお別れである。私が白山教会で洗礼を受けたのは大正7年の6月2日、ちょうど昨日で満48年、今日からは信仰49年生である。年ばかりとったが、結局初めに習ったことを繰り返しているようなもの。即ちイエスを救い主として信ずること、これである。理性でのみ追及するのは哲学であって、宗教ではない。

分からんでも続けておったらよい。分からんから去るのではなく、分からんからへばりつくのである。「汝らのうちに良きことを始めたまいし神は、終りの時に必ず完成する」とある。長期抗戦である。この金曜会も一見無駄だが、この建物になって50年も続いてきた。

(昭和41年6月3日 金曜会)

へばりつくこと、これが唯一の戦術

「分かる」のではない、「分からされる」。I am persuaded である。
水に映る月を見ても月らしい分子はない。我々の中を検討してみても神らしい分子はない。しかし神は我々に映る。信仰は奇蹟である。
人間の知恵によるのではない。信仰の道を行く人はない。大乘経にも易往無人とある。我々の信仰はイエス・キリストの上に立っている。だから動かない。我々の上に立っているならグラグラだ。金沢常雄先生（大7）の「信望愛」の最終号の冒頭に「希望」とある。ヨハネ伝 14 章 1～3 をよく読んで見よ。へばりつくこと、これが唯一の戦術である。

（昭和 41 年 6 月 3 日 金曜会）

献金は信仰のバロメーター

献金は信仰のバロメーターである。私はいつも同じことを言うのですが、小西はよくこんなことを言っていたということを死ぬまで覚えておいてください。

それはこういうことです。もっとも大切なことはイエス・キリストの贖いによって救われるということです。又死後の世界があるということです。私は諸君に良いことをしろとか信仰を篤くしろとか言わない。もっとも大切なことはイエス・キリストの贖いによってのみ救われるということを知ることです。

(昭和 41 年 9 月 12 日 金曜会 テモテ教会にて)

一隅を照らす人になれ

金曜会で切磋琢磨して欲しい。本日の金曜会で私がこういうことを言っていた。「同志会の百年祭には是非出たい」と言っていたことを覚えておいてほしい。何事も百年しないと立派にならない。同志会も15年が基礎。前の建物の50年が成長、これからの35年は精神を入れて完成する時期である。第3期に当る諸君は責任が多い。百年の基礎ができるかどうか君達にかかっている。

同志会にはこの世で著名で立派な人が多いが、そういうことは大したことではない。そういうことで同志会は出来ていない。同志会は会長のおっしゃった如く霊的な人間を作ることが目的である。諸君はどこへ行ってもその一隅を照らす人になれ。

(昭和42年5月19日 金曜会)

天国は力である

この世のものにかじりついて目あてにしている間はペテロのような力が出てこない。パウロは「天国は力である」と言った。百年を祝いたいが行きとおれないだろうから、君達に祝ってもらいたい。霊的人間になってほしい。教会に行つて勉強し、大いに聖書を学んで金曜会の席上で語れ。百年祭に出たがっていたとどうか伝えて欲しい。

(昭和 42 年 5 月 19 日 金曜会)

靈的真理

前回の“聖書を勉強せよ”(A君)と“日々の生活を誠実に送れ”(I君)という両兄の言葉は両方とも真理だが、片面の真理であって十分とはいえず。現在の生活を誠実に行なうというのは、いわば日本語の勉強である。これに対して聖書の勉強は英語の勉強である。両者に共通していることは謙遜と忍耐をもって学び抜くことである。この世を真剣に生き抜くことは大切。しかし靈的真理を求めずしてこの世にのみ専念してしては日本語は満点でも英語は0点。

内村先生は全生涯を福音のために尽くして67歳で死なれた(end)。僕はこれから始めようと思う(begin)。つまりエペソ書をギリシア語で始めて読んだのがつい最近であり、今が始め(beginning)なのである。聖書を研究することは非常に大切で、忍耐と謙遜が必要。それと同時に毎日を真剣に送らねばならない。内村先生の生活は毎日が真剣そのものであり、偽りなく真剣に生き抜かれた。しかしそこには聖書の勉強という靈的な支えがあった。…

日々生き抜くことと聖書を学ぶことは両刃の剣であり、両者が一体となって本物になる。

(昭和42年6月2日 金曜日)

自慢話

また自慢話から始める。ヨハネ伝、ルカ伝、使徒行伝、コリント前後書、ガラテヤ書、エペソ書の研究を 18 年間やっている。1970 年までエペソ書をやるつもりである。18 年間聖書を読むと大体聖書がどういうことを言わんとしているかが分かる。一つのことを 18 年間やるとへぼ学者にはなる。君らよりも少し知っているということになる。内村先生じきじきにロマ書の講義を聞いた。僕が死んだら内村先生に直接話を聞いた人はいなくなる。

エペソ書 5 章 1～6。神にならえ、キリストにならえということが書いてある。“こうして” というのはこの故にという意味である。これはつまりキリストは罪の贖いのために十字架についたということのためにという意味である。

(昭和 42 年 6 月 23 日 金曜会)

「愛せよ」の意味

「愛せよ」というのはどういうことであるかということについて言いたい。愛するという行ないは行動と考えと言葉の三つで愛の行為となる。キリストにならえということは、キリストは“おれは神の子である。自分はこの世での仕事が終われば父のもとに帰るのだ”という考えを持っていた。キリストがどんな行為をしていたのかはキリストの考えである。その行動は“神の命じ給うことをそのまま行なった”御心のままにやることが行動。言葉は祈りである。常に祈っていた。祈りをしていたと聖書に書いてある。神の命じ給うた事をする。この仕事を終えたら父のところに帰る。

(昭和 42 年 6 月 23 日 金曜日続き)

神の命じること、つまり目の前の義務をすること

我々は神の子ではなく滅びの子である。福音により神の子になる。しかるに今神の義があらわれた。ヨハネ伝 1 章。これを始まりとする。自分は神の子とされたという信仰が得られた。この世に於いて神の命じることをする。これは難しいことではない。つまり目の前にある義務をすることである。キリストは大工をしていて十字架につけられたが、この際逃げることはできたが、その時キリストは逃げないこと、つまり十字架につくことが主の御心とあって、ついに死んでも父の御元に帰るという信念があったからこそ出来たのである。人間離れのした心によってのみできたのである。

日々の与えられたことをしてこれをもって天国に行くということ、これをキリスト者というのである。

(昭和42年6月23日 金曜会続き)